季刊『Repis』巻頭言

情報通信技術を活用した地域づくり

山梨大学工学部長　　伊　藤　　洋

日本昔話の『桃太郎』は、「異界」との交流の成功談に他なりません。おばあさんが川で洗濯中に拾った桃の実は、おばあさんも知らないはるか上流の村からの贈り物でした。成長した桃太郎が手にした宝の山は、鬼ヶ島という極めつけの異界に蓄蔵されていたものでしたし、この冒険のアシスタントたちときたら雉子・猿・犬ですから、これもまたとびっきり異界の住人でありました。私たちが富や幸運を呼び込もうとしたら、異界と交流することなくしては不可能だと、この昔話は教えてくれています。

異界との交流による富の獲得は、何も昔話の荒唐無稽な「ほら話」の中だけではありません。20 世紀を貫いた工業化社会にあっても事態は全く同じであって、私たちの富の源泉は、国際という名の異界との分業的関係を基盤とした通商交易によって成り立っていました。畢竟、人間社会は異界との「連携と交流」によってのみ存在が可能な仕組みの中にあることを知らなければなりません。

ところで、IT＝情報通信技術に関する話題がいま最もホットです。この IT 技術を「異界」という観点から眺めて見ましょう。

「全ての道はローマに通ず」というのは古代ローマの繁栄とその版図の広さを表現した言葉でした。わが国のような島国であってみれば、よもや日本海や太平洋にトンネルや橋を架けるわけにもいかず、ローマに通ずることは実際上叶いません。しかるにネットワークはローマどころか世界中の津々浦々に繋がっています。しかもこのネットワーク＝インターネットは中心を持たないネットワークであり、「自律・分散・協調」をキーワードとする多軸型のネットワークであり、また距離とコストを消去し去った水平なネットワークであって、自立した人と地域だけに開放された知的ネットワークでもあります。そして、空間的な異界はそのネットワークの中に無数に存在しているはずです。異界は指呼の中、いやパソコンのマウスのすぐ先にあるのです。今日 IT 技術がかくも喧伝されるのは、こういう大きな可能性がここに秘められていればこそです。

さらに、この IT 技術を特徴付けているものの中にデジタルメモリーという記録媒体の異常なまでの発達があることをも指摘しておきましょう。過去の記録媒体であったパピルスの葉や紙や銅版と違って、デジタルメモリーは原理として決して変質しない記録媒体です。情報化社会とは、こういうメディアの中に記録された連続する現在であり、その蓄積された総体を歴史と言うのでしょう。歴史は、その体験者が見れば過去の記憶ですが、そのとき生まれていなかった者にとっては未来を

予言する、よくも悪しくも時間的異界です。津々浦々の地域には、近代社会が忘却した歴史が腐葉土の下に分厚く堆積してもいます。日本昔話の『花咲爺さん』のポチではないが、ここを掘ってみれば無数の富が眠っているはずです。埋もれた地域のアイデンティティーを発掘するよすがもまた、IT 技術の中に伏在しています。

これらを要するに、IT 技術とは、時空間の広がりの中で異界との交流を促進する技術であることが見てとれます。富や幸運は、これら時空間の異界の中に間違いなくあるはずです。

1998 年発表の「新しい全総（全国総合開発計画）」は多軸型国土形成を謳っています。これを IT 技術に直訳すれば、そのままマルチネットワークトポロジーの提案にほかなりません。21 世紀の地域づくりは、遥かなる時空を越えた異界との「交流と連携」から始まります。そこでは、「全ての道は（ローマにあらずして）異界へ通ず」と言わなくてはならないのです。